

# 聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

## 第4章 ダビデと他の詩篇記者たちの祈り③



困難のただ中での祈り

讃美の表現としての祈り

敬虔なリーダーによる公的な祈り

### 困難のただ中での祈り

「ダビデの時代に、三年間引き続いてききんがあった。そこでダビデが主のみこころを伺うと、主は仰せられた。『サウルとその一族に、血を流した罪がある。彼がギブオン人たちを殺したからだ』」（Ⅱサムエル 21:1）。逆境というものは、それが物理的・地上的なもの(干ばつ、飢餓、苦難、病気など)であれ、信仰上のもの(神の民の信仰の退潮など)であれ、神のご臨在があまり感じられなくなった状況であれ、いずれも主のみこころと御顔を真摯に求めるところにつながっていくべきものです。そのように主を求めていくと、現状、あるいは、なかなか変わらない状況というものの原因が明らかにされることがよくあるのです。

ダビデは、イスラエルの現在の問題が、前政権に起因するものであることを知り、かつて種が蒔かれたものを、現在に及んで刈り取らされているのだということを知りました。サウルが、その性急さと無思慮のゆえに、イスラエルと盟約関係にあったギブオン人(ヨシュア 9:15-27 を参照)への攻撃を指示していたのです。本人は既に死亡しているものの、神の正義がそれを放置しておくことはありませんでした。問題に対する神の視点を強固な基盤として、ダビデは解決策の実施に取りかかるのでした(Ⅱサムエル 21:3-6)。「その後、神はこの国の祈りに心を動かされた」(21:14)。



## 讚美の表現としての祈り

讚美は、祈りの中でも本質的な部分であり、そればかりか最高の形であり、とりわけダビデはその点において非常に優れた人物でした。



「主が、ダビデのすべての敵の手、特にサウルの手から彼を救い出された日に、ダビデはこの歌のことばを主に歌った」(IIサムエル 12:1)。サムエル記下 22 章は、全編にわたって讚美の詩となっています。ダビデは、日々の歩みの中に主がはっきりとわかる形で働いておられることを覚え、最高の讚美を捧げています。神の御力を認識し、神による解放のゆえに、とりわけ最も生命が脅かされていた状況からの解放のゆえに、神をほめたたえています。そして、神が与えてくださる導きと力、勝利のゆえに神をあがめています。神はまさに、あらゆる讚美にふさわしい、真実な方であられるのです(ダビデの祈りの生活に見られるこの側面は、個々の詩を取り上げてみると、さらに強調されることでしょう)。

## 敬虔なリーダーによる公的な祈り

歴代誌下 29 章には、イスラエルの会衆の前に立つてのダビデの祈りが記録されています。

ダビデは全集団の目の前で主をほめたたえた。ダビデは言った。「私たちの父イスラエルの神、主よ。あなたはとこしえからとこしえまでほむべきかな。主よ。偉大さと力と栄えと栄光と尊厳とはあなたのもので、天にあるもの地にあるものはみなそうです。主よ。王国もあなたのもので、あなたはすべてのものの上に、かしらとしてあがむべき方です。富と誉れは御前から出ます。あなたはすべてのものの支配者であられ、御手には勢いと力があり、あなたの御手によって、すべてが偉大にされ、力づけられるのです。今、私たちの神、私たちはあなたに感謝し、あなたの栄えに満ちた御名をほめたたえます。

私たちは、すべての父祖たちのように、あなたの前では異国人であり、居留している者です。地上での私たちの日々は影のようなもので、望みもありません。私たちの神、主よ。あなたの聖なる御名のために家をお建てしようと私たちが用意をしたこれらすべてのおびたしいものは、あなたの御手から出たものであり、すべてはあなたのもので、私の神。あなたは心をためされる方で、直ぐなことを愛されるのを私は知っています。私は直ぐな心で、これらすべてをみずから進んでささげました。今、ここにいるあなたの民が、みずから進んであなたにささげるのを、私は喜びのうちに見ました。… 主よ。御民のその心に計る思いをとこしえにお守りください。彼らの心をしっかりとあなたに向けさせてください。わが子ソロモンに、全き心を与えて、あなたの命令とさとしと定めを守らせ、すべてを行わせて、私が用意した城を建てさせてください」。(歴代誌上 29:10-13,15-19)

この優れた祈りは、人前で祈る全ての人に模範となるものですが、心に重荷を抱くリーダーの真摯な心情表現として、まずは五つの部分に分けることができます。

1. まず模範となるのは、**神のご臨在の中に確信をもって入っていく姿です(10-13節)**。群れのリーダーたちにとって、実に喜びに満ちた、心をかき立てられるような模範となっています。神の偉大さと力を認識し、その天的な尊厳をあがめ、栄光に満ちた御名に讃美を捧げている姿は、人前でいかなる祈りを始めるうえでも適切な形だと言えます。
2. ダビデは、**神が力を与えてくださることを認識しています(14-16節)**。神が必要なものを与えてくださらなければ、誰も何も与えることはできないでしょう。「すべてはあなたから出たのであり、私たちは、御手から出たものをあなたにささげたにすぎません」。私たちは誰も、自分の捧げるものにおいて栄光を受ける余地はありません。ダビデと同様、私たちもただ、神から与えられるものに栄光を帰すことができるだけです(Ⅱコリント 9:8)。神の御前でこの真理を認めることは、神から与えられたものを人々に分かち合っていくことを、より可能にしていくのです。
3. ダビデは、**神は正しい心を喜ばれると告白しています(歴代誌上 29:17)**。彼はまた、神があらゆる人々の心にある思いと意図をご覧になると理解していますが、リーダーたる人であれば、彼のこの理解に思いを巡らせ続けることでしょう。神はとりわけ、神に仕えるために自らを捧げたいと願う人々、自分の能力と所有物を喜んで捧げたいと願う人々をお喜びになるのです。
4. ダビデは、**神の民の間に引き続き、主を思う心があるようにと願っています(18節)**。主を思う心とは、神のような思いということですが、したがって、そのような思いを抱くことで、神のうちに、また、その本人のうちに大いなる喜びが生まれるとしても不思議ではありません。この性質が永続的なものとなりますように---ダビデの願いと私たちの願いはかくあるものであることでしょう。
5. ダビデは**他のリーダーのためにも祈っています(19節)**。彼は息子が自分のように、神の心になつた者となり、父親である自分のビジョンを実行してくれるようにと祈りました。私たちもまた、親である人なら誰もが、この敬虔な信仰の巨人と並んでひざまずき、同様の願いを捧げようではありませんか。

詩篇に記されているダビデと他の人々の祈りを、一つひとつに十分な注意を払いながら見ていくと、それ自体が膨大な一冊の本になってしまいます。そこでここでは、ダビデの実践から主要な教訓を得るために、ごく限られた祈りだけを見ていくことにします。しかしながら、これは理屈の上だけの学びとなるべきではありません。「詩は音楽と同様、分析され、細分化されるが、究極的には、高く鑑賞され、体験されなければならない。主観性という要素を詩の理解から引き離すことは、この要素を詩の持つ力から追い払うことなのである」。

真摯な祈りは、人の真の自己を正確に測るものであり、心の開示です。したがって、詩篇は、祈る人々にとってのプリンスであるダビデ(サムエル記下 23:2)や他の詩篇記者たち(歴代誌上 25:1)の正確な肖像を、聖霊が彼らを通して語ったままに描き出してくれています。彼らは、誰もが同じ聖霊によって、私たちに祝福するために用いられたのです。

## ? 質問

1. どのようにすると、なかなか変わらないという逆境の原因がわかりますか？  
祈りの中で思いもしない原因を教えられて、その結果、解決に向かって状況が変化したことはありますか？
2. ダビデは讃美において非常に優れた人物でした。ダビデはどのようなことで神をほめたたえていますか？  
あなたは、祈りの中で、どのようなことについて、どのように神を讃美していますか？
3. リーダーとして人々の前で祈る時に、ダビデは、誰が力や必要なものを与えて下さると認識していましたか？  
(ア) この真理を認めることはどのような行動につながっていきますか？  
  
(イ) あなたの祈りには神への献身のことばや願いが含まれていると思いますか？
4. ダビデは、神の民がどんな思いを持つことができるようにと祈っていますか？  
あなたは自分の思いや考えや感情が守られるように祈ることがありますか？
5. 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？  
どんなことを実践したいと思いますか？



祈り

神さま、賛美の中であなたのみ名をあがめます。逆境にあるとき、あなたの知恵を与えて下さり、私を正しく導いて下さい。私の心と思いを守って下さり、ささげる思い、正しい考え、他の人のために祈る者として下さい。